



Raffiné Journal vol.00

世界観に触れる、
ひとつの余白を —

Raffiné

—



Raffiné とは

Raffinéが見つめているのは、
「どう見せるか」ではなく、
「どこに立って、生きているか」です。

人は、言葉よりも先に、
すでに、佇まいとして世界に立っています。

何を受け取り、
どの距離で向き合い、
どこに重さを預け、
何を先に見ているか。

それらは、
いつの間にか、定まっていきます。

Raffinéは、
その位置に、
静かに立ち戻ります。

整えるためでも、
変わるためにありません。

ただ、
自分の立ち位置を、
確かめるためにあります。

身体、心、存在、頭。
それらが整うとき、
佇まいは、滲み出でていきます。

ここは、
自分に戻るための場所です。

洗練を、内側から。

洗練は、外側ではつくれない。
内側の静かな光から、そっとにじみ出す。

Œuvre — 思想の核



Œuvre — 佇まい

Œuvre は、
Raffiné のすべての始まりに置かれた、
ひとつの原点です。

人は、
自分を語る前に、
すでに、佇まいとして世界に立っています。

何を考えているかよりも、
どこに視線を置いて生きているか。

どんな言葉を選ぶかよりも、
どの位置から世界を見ているか。

Œuvre 「佇まい」 は、
その “意識される前の立ち位置” を、
静かに見つめた作品です。

整えるためでも、
変えるためでもありません。

ただ、
自分がどこから生きているのかを、
問い合わせるためにあります。

Raffiné のすべての作品は、
この問い合わせから始まっています。



Edition — 思想を器にする —テーマ紹介—

Edition は、
Œuvre で示された問いを、
人の内側に置き直すための器です。

思想は、
読まれただけでは、
生きていません。

身体に触れ、
心に耳を澄まし、
存在を確かめ、
頭で選びなおす。

Edition は、
そのための四つの入口として、
つくられています。

どれか一つではなく、
四つすべてで、
ひとつの構造になります。

食の内景 — 身体

食は、内側の光を育てる“身体の土台”。

身体は、
考える前に、すでに受け取っています。

何を通し、
何を拒み、
何を残しているか。

そのすべてが、
食として、静かに現れます。

食の内景は、
身体がどこに立って
世界を受け取っているかを、
見つめるための作品です。



静謐の呼吸 — 心

心の静けさは、まとう空気までそっと変えていく。

心は、
感情よりも先に、距離を持っています。

近すぎるか、
離れすぎているか。

そのわずかなずれが、
騒がしさとして現れます。

静謐の呼吸は、
心がどの距離で
世界と向き合っているかを、
確かめるための作品です。



存在の本質 — 存在

存在の美しさは、在り方として滲んでいく。

人は、
役割よりも先に、重さを持って立っています。

どこに重心を預けているかは、
語られなくても、消えません。

評価されなくても、
承認されなくても、
その重さは、そこにあります。

存在の本質は、
自分がどこに立っているのかを、
静かに見つめ直すための作品です。



価値観の航路 — 頭

価値観は、人生の進む方向を照らす “内なる羅針盤”。

頭は、
判断よりも先に、
ひとつの順序を持っています。

何を前に置き、
何を後ろに下げるか見ていくか。

その並びが、
生き方になっていきます。

価値観の航路は、
自分がどの順序で
世界を見ているのかを、
確かめるための作品です。





Journal — 呼吸と日常

Journal は、
出来事を記録するための場所ではありません。

日々の中で、
ふと立ち止まった瞬間や、
言葉になる前の違和感。

そうしたものが、
静かに沈んでいく場所です。

考えきれなかったこと、
整理しなかった感覚、
そのまま残ってしまった余韻。

Journal は、
それらが、美学へ変わる手前で、
呼吸している場所です。

思想ではなく、
結論でもなく、
まだ形になっていない視点。

それらを、
そっと置いています。

次号（vol.01）は、
「佇まいの美学 — 静けさは、人を美しくする」

静けさが美をつくる、その始まりをめくります。

※Raffiné では、
作品から生まれる余白や、
別の視点として立ち上がる景色を、
静かに収蔵していく場も用意しています。



R.

Raffiné Journal — vol.00

著者：美学思想家 古川玲奈

発行：Raffiné

2026